黒埼町の人々

第195回　執筆　宮田栄門

新聞からたどる黒埼の歴史（六十六）

流しかき用の網は終戦後の品不足から、麻の代用品としてラミ糸を使った。

（先月号からの続き）

大野の流し場はもう一か所あり、そこは大野の小沼（諏訪神社裏の堤防あたり）の川を流す北斉場といわれた。下塩俵の出つぱな（新町石川権八酒店の向かい）あたりがばんこ待ち場で、そこから網をまいて下り、今の大野大橋（昭和三十八年ころ架橋）のあたりに来ると網をあげた。ここもその網とりのあたりでよく鮭がかかった。大野の人でこの北斉場で流したのは、筆者と新地の、名前は一寸忘れたが渋谷という家号すだれやの親父さんの二人位だった。

この北斉場には下塩俵の流しかきが十人程いたが、網のまき方から鮭の捕り方まで、すだれやの親父さんの名人芸にかなうものは一人もいなかった。たまに筆者は町裏場を流したことがあるが、当時、新田町の川端には何十艘ものコウレンボウが幾重にも繋留されていて、網の端がひっかかるのではないかと、ひやひやしながら網を流した思い出がある。

今の流し網はナイロン製の三段網で、鮭があたれば必ず捕らえることができるが、終戦当時の麻やラミ糸の網は、前に記した通り一枚網の上、常に柿の渋をつけて置いたので、さらさらとさかし易かったが、鮭のからまり具合が悪く、網にあたってもだぼだぼとはねながら網目を抜けたり、破ったりして逃げることが多かった。漁場での流しかき仲間の会話に「夜っぴり（一晩中）流して五本も鮭に会ったろも、一本も止まらんかったてば」などと言われた程である。

しかし、このような網を使って、昭和二十一年のころ一晩に十一匹もの鮭をとった当時の組合長風間三平さん（川原）の記録が今も残っている。

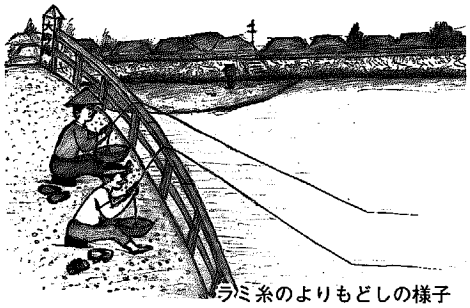
当時、筆者は毎年のシーズン中、ほとんど毎日のように流しかきに出たが、十数年間中での年間最高記録は十一匹だった。漁獲した鮭は白と銀のように光った鮭で、最近テレビなどで見る三面川や海で捕れるぶちて汚れた鮭は一匹も捕ったことがなかった。

はじめ北斉場で多く流していたが、次第に町裏や大川へ行くようになった。そして、寺地の鉄塔場という、一番下の場まで流しに行き、たいていは一匹も捕れずへとへとに疲れて、やっとこすっとこ櫂を漕いで帰った思い出がある。

面白い、鮭の糸くわえ

流しかきに、糸くわえという面白い鮭の捕り方がある。これは、あっ、居たようだったと思ったのに網の中に鮭はおらず、がっかりして網を舟にたぐり上げようとしたら、網の糸目を口にくわえた鮭がからまらないで、ひょっこりと網にぶらさがるように上がってくることがある。昔、流しかきの先輩から聞いた話に、海から川に子を産むために上る鮭は、川に入ったら一切餌はとらない。即ち口は絶対開けないということで、この糸くわいは、網に驚いた鮭が一瞬口を開けて網の糸をくわえると、舟の上に引き上げるまで口を開けないためのようである。

注　大野の町裏場は、昭和二十五年初代信濃川橋の架橋と同時に流されなくなり、河川改修工事で善久の内川もなくなった。上流北斉場は三十年代のころ、まだ下塩俵の人たちが流していたが、大野大橋架橋のころからなくなった。外に金巻場には泉新太郎さんたちが、板井の場には大矢権八さんたちが昭和のはじめころから流していたという。



ラミ糸のよりもどしの様子

筆者の体験したエピソード

大変だったラミ糸のよりもどし

昔から流しかきで器用な人は、たいてい自分で網を仕立てたり（網を編むこと）、網が破れれば繕っていた。筆者の父もよく自分で使う流し網を編んで仕立てていたが、終戦後の品不足から麻糸が手に入らないとき、麻の代用品といわれたラミ糸を使っていた。ところがそのラミ糸はよりもどしをしないと網に編むことができなかった。そこで、父に言い付けられてよく大野橋へラミ糸（糸は大きなおにぎり状に巻いてあった）とザルを持って糸のよりもどしに行った。よりのもどし方は、橋の真ん中あたりに陣をとる（腰をおろす）と、ザルの中に入れたラミ糸の端を引き出して、橋の欄干の上からたらして中ノ口川に入れた。糸は流れに乗ってぐんぐんと流され、ザルの中の糸の玉がくわらくわらとほぐれてゆく。そして、はじめの内はにぎっても軽い反応しかなかったラミ糸の玉が次第に小さくなるにつれ、糸を引く川水の水圧で手が痛いほどになった。離したら大変と必死につかんで糸玉の端がくると、今度はザルの中にたぐりこむのだが、その引っ張る時の糸の圧力、それによって糸のよりがもどるというのだが、それは大変な仕事だった。欄干の上からピーンと張って伸びた糸は、何千何百メートルあったか知らないが、そんなに長い糸を流しても何もひっかからなかったのだから、今思えば不思議なことである。下流にはまだ信濃川大橋ができていなかったためだろうか。当時は大野橋の真ん中あたりの欄干の上部には、無数の切り込んだようなよりもどしの糸の跡がのこっていたものである。

忘れられないこわかった流し漁の思い出

昭和二十二、三年ころのこと。家の流し舟は漁期になると何時も新地のすだれやの裏の中ノ口川に付けて置いた。そのころあさこうといって朝の三時ころ起きて、筆者はよく流しかきに行ったが、十一月の午前三時というと外はまだ暗闇である。網を入れたザルを片手に櫂をかついで家を出ると、そのころの諏訪神社の境内はこわかったが、川への近道だったのでよくそこを通った。

注　今と違って神社の周囲にまだ家が一軒もなく、境内には大小たくさんの樹木や、雑草が繁り、ある時、本殿脇の松の大木に呪いの藁人形に五寸釘が打たれていたなどという噂もあり、夜その周囲を歩く人はほとんどなかった。（続く）

平成十年七月一日発行（毎月一日発行）四一八号　発行／黒埼町役場　〒九五〇-二一九六　新潟県西蒲原郡黒埼町大野二八四三-一　電話／〇二五-三七七-三一〇一　編集／企画商工課（担当・広報統計係）　印刷／小野塚印刷㈱

「広報くろさき」は資源保護のため再生紙を使用してます。